河川基金助成事業

「江戸時代の名水番付からみたアクアツーリズムの 本質的価値の探求」

助成番号: 2021 - 5211 - 040

法政大学 現代福祉学部 准教授 野田岳仁

2021年度

1. 問題関心

1.1 本研究の目的

本研究では、江戸時代に流通した名水番付「都名水視競相撲」をとりあげる。この番付が興味深いのは、私たちの現代的な感覚からすれば、決して名水とは呼べないような池や沼が上位に位置し、湧き水や井戸水が下位に位置づけられていることである。京都から唯一「昭和の名水百選」に選定されている有名な名水「御香宮神社の御香水」も下位とされ、現代的な評価基準とは明らかに異なっている。そこで本研究では、なぜこのような逆転現象が起こっているのだろうか。本研究では、江戸時代の名水番付の評価基準を明らかにしていく。

この番付の評価基準を明らかにすることができれば、現代の私たちの名水に対する価値観「水のきれいさ・旨さ」とは異なる物差しで名水を価値付けることができ、水に対する新しい見方や価値を提供できるかもしれない。

このような問いを掲げる理由は、近年注目される"アクアツーリズム"と呼ばれる新しい観光実践の停滞を乗り越えるヒントを得ることができると考えるからである。

アクアツーリズムとは、地域の井戸や湧き水などの名水を観光資源とした新しい観光実践である(野田 2013;2014)。それらの契機となったのは、環境省による名水百選の選定である。1985(昭和60)年の「昭和の名水百選」と 2008(平成20)年の「平成の名水百選」と、全国には200箇所による公的選定の名水が存在しており、地元ではこの名水を活用してまちづくりに乗り出している。

名水百選を活用したまちづくりのありふれた方法を紹介すれば、公的選定を受けると、観光スポットとするべく地元の行政は水場の環境整備に乗り出し、東屋をつくったり、観光案内板を立てたり、ボランティアを募って観光ガイドを始めたりすることが多い。各地の状況を探ってみると、当初はそれなりに観光客が訪問することもあったようだが、現在では観光客も減少し、その多くは停滞するようになっている。たとえば、東北地域を代表する名水のまちとして知られる秋田県仙北郡美郷町六郷地区では、「昭和の名水百選」に選定され、公的選定後から地元行政による観光スポットの整備や地元ボランティアによる観光ガイドを実施するなど、名水を活用した町おこしの成功事例として広く知られるようにもなっていた。ところが、近年ではめっきり観光客も減少し、名水を守ってきた住民による管理組織も弱体化が懸念されるようになっている。行政資料によれば、2009(平成21)年には83,399人もの観光客が訪れているが、年々減少し、2012(平成24)年には42,713人へと半減している(野田2018)。それ以降観光客ははっきりしないが、観光客の姿を見かけることはまれで、水場はひっそりとしている。観光客の減少と水場の管理組織の弱体化の傾向は多くの名水百選の選定地に共通している。

なぜ停滞しているのだろうか。その理由を端的にあげれば、公的選定という水に対する国の価値付けに頼りすぎて、他との差別化が図れていないからである。繰り返しになるが、名水百選は全国で200ヶ所もある。公的選定を受けた当初は、物珍しく集客も期待できるのだが、実際に訪れてみると、ただ水場を観光スポットに整備しただけで、まるで金太郎飴のようにどこも同じ光景がみられるようになっているのである。すなわち、名水百選の多くの地域では、他の名水百選との違いが見いだせず、個性を失っているのが現状なのである。

では、江戸時代の名水番付の分析がどのようにアクアツーリズムの現代的に課題とかかわっているのだろうか。そのことを説明する前に現代に生きる私たちにとって、名水にはどのような価値観が込められているのかを確認していこう。

1.2 名水とはなにか?

各地で観光資源に活用される名水とは、どのような水を指すのだろうか。現代に生きる私たちにとって、名水といわれて思い浮かぶのは、次の二つのベクトルであろう。

ひとつは、科学的にきれいであること。すなわち、それを飲むことのできる水質を保持していることである。そのうえで、それが旨い水でなければならないという人もいるかもしれない。人によっては、それらに細かな条件を加える場合もあろう。実際に、1985(昭和 60)年に旧厚生省は名水を"おいしい水"ととらえて、硬度 $10\sim100\,\mathrm{mg/L}$ 、蒸発残留物 $30\sim200\,\mathrm{mg/L}$ など 7 項目を定めている。"おいしいさ"という主観に左右されがちなものさしを科学的にその成立要件としてまとめていることが注目される。

もうひとつは、名水といえば、先にも述べた通り、環境省による選定制度「名水百選」を思い浮かべる場合もあるだろう。その条件は、次のようなものである。水量、水質、周辺環境、親水性の観点から保全状況が良好であることを挙げている。さらに特徴的なことは、地域の自然環境への関心の高まりを受けて、地域住民の保全を必要条件としていることである。というのも、地域住民の保全が必要なのは、たんに環境保全のためだけではなくて、選定後に多数の観光客が訪れることを想定して、観光資源としてそれに耐えられるだけの保全体制を確立することも求められるからである。

このようにみれば、現代において名水に込められた価値観には、少なくともこの二つのベクトルがあるだろう。すなわち名水とは、「水のきれいさ・旨さ」が評価基準となっているといえるのである。

このような状況をふまえたうえで、なぜ本研究では江戸時代の名水番付を通じて、当時の人びとの名 水に対する価値観を把握しようとするのかその理由を示しておこう。

その理由は、江戸時代の名水番付には、現代的な名水への評価とは明らかに異なる基準が与えられていると考えられるからである。江戸時代にはおよそ3000種類の番付が流通したことが知られているが、そのなかでも水に関連するものをリストアップすると、下記の表にまとめられる。

種類	年代	表題	作者・版元	所収・所蔵	
名水	1802(享和2)年6月	都名水視競相撲	京寺町錦小路上ル町阿波屋定次郎版	『江戸時代図史<2>京都』所収・筆者蔵	
氷・水		和漢氷水名所見立相撲	曙千角作	『浪花みやげ三編五』所収・早稲田大学蔵	
滝	明治14年	全国大瀑布一覧表		保田信親『日本自慢 初編』所収・国会図書館蔵	
ル		大日本滝づくし		『浪花みやげ初編二』所収・早稲田大学蔵	
		大日本国々高名大川相撲競	東江一夢庵小蝶筆	『松の寿』など所収・筆者蔵	
		大日本国々名高大川角力	錦屋喜兵衛板	金沢市立玉川図書館蔵	
		大日本国々名高大川角力	わた宗	『たのしミ双紙参』所収	
		大日本国々名高大川角力		『江戸じまん』など所収	
JII	1840 (天保11) 年	大日本国々名高大川角力	大阪高らいばし三丁目河内屋得兵衛板	『浪速土産二』所収	
711	1840 (天保11) 年	大日本国々名高大川角力		石川県立歴史博物館蔵	
		諸国高名大川取組番附	東都馬喰町三丁目泉永堂梓	個人蔵	
		諸国名高大川見立角力	亀嶋町栄版	三井文庫蔵	
	明治14年	全国大川見立初編		保田信親『日本自慢 初編』所収・国会図書館蔵	
		大日本大河一覧		『江戸じまん』所収・国会図書館蔵	
			「見立番付総	合目録」(2003)をもとに調査を加えて筆者作成	

表-1 水に関連する江戸時代の番付

このなかでも本研究がとりあげるのは、1802(享和 2)年に京都で発行された「都名水視競相撲(みやこめいすいみくらべずもう)」である。その名の通り、京都にある名水を格付けした番付表である。というのも、格付けされた項目が圧倒的に多く、また水に関連した番付に共通した傾向がもっとも強くあらわれていると考えられるからである。

その傾向というのは、繰り返しになるが、私たちの現代的な感覚からすれば、決して名水とは呼べないような池や沼が上位に位置し、湧き水や井戸水が下位に位置づけられていることである。なぜこのよ

うな逆転現象が起こっているのかを明らかにしていく。

次章からは、「都名水視競相撲」の翻刻と格付けされたそれぞれの名水について、江戸時代の地誌など 膨大な史料にあたり、名水の特定を行う。そのうえで、評価基準を分析していく。

2. 都名水視競相撲の解明

2.1 番付分析の意義

分析に入る前に番付研究の意義を確認しておきたい。番付研究の先駆者でもある歴史学者の林英夫と 芳賀登は、番付分析の意義を次のように論ずる。すなわち、支配者の側のではなく「庶民の価値観を把 握できるもの」として番付研究に価値があることを示している。というのは、番付は「町人・民衆・被 支配者のコミュニケーションとして江戸末期以後の民衆が育ててきたもの」(林・古賀 1973b)であるか らである。

とりわけ、名所番付は「地理的・地誌的知識の共有化を再生産していく役割」を担い「当時の流行や 風俗を知るための史料」(林・青木 2003) とされる。このようにみれば、番付の分析を通じて、当時の 人びとの価値観を把握していくことも可能といえるだろう。本研究もこのような研究の流れに位置づけ られるものである。

2.2 番付の性格と信憑性

そもそも番付とはどのようなものなのだろうか。番付という発想は、歌舞伎興行の役柄の横型看板を 由来としているという。その後、相撲番付という縦型の番付の登場によって、庶民の間で物事を格付け て楽しむ文化が広く普及することになったのである(林・芳賀 1973a)。

江戸時代にはさまざまな番付が作成されている。後のガイドブックのように利用されたといわれる名 所番付や長者番付、地震火事番付、温泉番付、嘘番付など幅広い。自然をとりあげる名所番付には、名 水番付、大川番付、松桜番付などがある。

それらの多くは江戸や大阪が発信源となっており、各地で流布がみられた。大川番付は、複数の版で発行されたと推察され、番付が違っていたり、それぞれ少しずつ違いがある。けれども、名水番付は京都以外では確認できない。

研究史を参照してみると、名所番付には2つの流れがあるという。ひとつは、実用的な案内書としての内容を持つもの。もうひとつは、作成者の遊び心によってまとめられたもの。前者からは、当時の社会の流行や風俗を知るための史料としての可能性がみえてくるという。後者からは、知的な遊びの世界がどのようなものであったのかがみえてきそうだという(林・青木 2003)。

名水番付は前者の流れに属すると考えられる。というのは、すぐ後に述べる信憑性の問題ともかかわってくるのだが、この番付では版元がはっきりとしているからである。すなわち、実用性の高いいわゆる観光案内書という意味合いを持っていたと想定される。

番付という史料を扱ううえでもっとも問題とされるのは信憑性である。本当にそれが信用できる史料といえるのか、そうした疑いがつねについてまわる。番付は庶民のあいだで出回ったという性格上、そのほとんどには作者や版元、情報源が残っていないからである。番付の端に版元や作者名の入ってないものは遊び心で作ったものと理解され、信頼性も低くなると考えられている。その一方で、作者や版元の記載がある番付では、実用性が売り物とされた番付として理解できる(林・青木 2003)。

では、「都名水視競相撲」はどうなのだろうか。番付の左端には、「京寺町錦小路上ル町 阿波屋定次郎板」(写真-1)との記載がある。たしかに阿波屋定次郎という版元は実在した。江戸時代に浄瑠璃の詞章本や「はやりうた」の唄本を出版する定評ある版元とされる(黒川 2012)。この版元から出版された浄瑠璃の宮薗節の薄物正本には、所在地として「京寺町錦小路上丁」の記載があることからも間違いない(黒川 2011)。よって、この名水番付は信頼できるものであると考えてよさそうである。さらにいえば、

実用性のある観光案内書として広く受け入れられていたものとして評価できるものである。 これらを確認したうえで、分析に入っていこう。まずは翻刻を行った。

2.3 都名水視競相撲の翻刻



写真-1 都名水視競相撲(筆者所蔵)

此	方:	 ナ :	L F	터		_1_		T		方		/	南	i	申		
外	前前前前	前前	前	小 関	大	者		前	前	前	前	前	前	前	小	関	大
洛	頭 頭 頭 頭 路 下 金 神	頭頭		結 脇	関	Н		頭小	頭八	銀銀	頭大	頭宇	頭 伏	頭稲	結同	脇同	関城
外	洛 下 金 神 思 閣	西 洛 西		洛 同	洛西	5	Z ,	· 枝	幡	閣	通	治	見	荷	[H]	[H]	南
洛	寺 苑	倉		16	<u> </u>	1	_			寺	寺						
中	鯉 御 鏡 法	三大		御長		—		稲	石	洗	神	米	江	谺	伏	美	巨
之	手 洗 湖 成 就	段澤		菩 岡	澤	フ		瀬	清	月	龍	炊	雪	ケ	見	豆	椋
名	丿 丿 池 丿	11	1	薩ノ	1	上	=	ケ	水	池	池	水	堀	池	ノ >==	入	入
水	池水池	滝 池		池 池			見	淵							澤	江	江
書	同同同同同同	同同同	同同同	同同	同前頭	12	r.	同同	可同	同同	门同	同同	可同	同同	可同	同	同 前 頭
残	同月等天大小	鷹嵯滔	5 嵯 小	同嵯	相貴	音	竞	同意	常 東	南下	泉	山清	青若	七i	重黄	平	
シュ	ノ持竜原佐	峰峨丬		峨	国舩	14,	<i>/</i> L	4	を 福	禅洞	涌	科 7.		条見	天 檗		福置
候	輪院寺が温日高芙曹朧冴	菩戸音	千刹	1. La	^守 功龍	十	Ħ	老V 豆	日寺	寺原拳媒		牛音	子新	畚 ⅓	先 放		寺 思 千
分	ロ同天 電影で に に 野蓉源ノ野	一 提 類 類	1 1 例		が能を	1	口	卒)		ずれ			习智		医生		遠手
	ノノ池池清ノ		淵池		池ケ	4	Π̈́̈́		ノ池	池	水			淵》	間池	池	
跡	滝滝 水沼			池	滝	1	天	滝流	电			ノ流	龍滝				滝
ゟ	同同同同同同		同同	同同	同前	司	行	同同	可同	同同	一同		可同	同同	可同	同	同同
差	大同鞍矢大洛	度 白 14	/ 士 同	龙 度	頭大 愛	口口	1 J	同意	常 大	黒木	-iv	六桁	生 蛇	長な	た 無h	沙巴!	お 乾
加	原 馬背原西			ノ沢	八岩沢岩			PJ /F	を智	黒谷や	/r-□	波り		楽量		草:	公 峯
^			谷	寺		高点光	宁 清灬		山寺	梧	堂	羅趾	各山	寺	寺		Щ
可		足駒東	印御翁	指佐	名日	野山と	一滝川	石组神	金洗			姿力			兰 氷		樓 降
申	不之ノ盛和沢動滝閼甲井ノ	形ケパノ淵ヨ	杖之		杜暮ノノ	加州人		童		谷様	とと		上楽		之室	・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	明三世
候	ノー伽ケノ池	/ VIII -	水		滝滝		' / ' '	1	1	洗水		池沙		/] \ 11	池	, '	竜之
<u></u>	滝 井淵池 ['] 同同同同同同同同		71. 71. 71.	水	.11			滝	竜	池						水	滝
京寺	 	H1 H1 H1 I	111111111111111111111111111111111111111	111111111111111111111111111111111111111	明明	救害 <u>数</u> 声 井	早相 拔	4		同同							
	大妙矢双西洛廣西	同一月1	木大□□	訓司古名		合舩馬瀬川工		御深	ケ南	唐 上:	丰車	字知	丸溏	下伏	城同	同ダ	が新稲
錦	徳心背ヶ洞北沢山		□	知	ガ西	וון יין וועונעונעונען ווע	יון ועי קועוועיין וועי אועוועיין	影口	田禅	水醍	」 田山	治恩	山水	鳥見	南	置	一十一十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二
小	寺寺 岡院 一	輪号	宇寺 ますずっ	谷号	宇 5 名 né			堂寺	中的	醐		院		羽		c:	原山
ПА	官風神衣柳白千三 池水子ノノ川壺 _幸	明和女易	ラ具来で 見珠王智	コ馬女属 会守郎門	B亀場 B尾ル	瀬 見 _五 若止五字	紙音去有藍	現(不) 古	日別			喜紫					上鳥怕 一之荷
上	泉ケ滝水ノノァ	ノ水水		・ケケノ	ノノ滝	ノ手 中位多		池ノ		水味				水水			
ル	淵 滝井カ	井	聖香》	開淵淵潭	 電	ויעויני זויקוול ווע	אועויני איעויע	池	池	水		浄・			古	ケ淵	滝
町	同同同同同同同同	同同同同	永小 引引同同	वीनीनी	司司前							水			1上	////	,一前
		1. 31. 31. 31.	31. 31. 31.	31. 31. 31.	頭	取	頭	同同	同同	同同	可同	同同	同同	同同	同同	同同	间间"
	同比西嵯法同柳同	松同岩[司大太生	,同相	,	, ,	仏鳥	□南	知同	平口	下同	同同	本大	同井	醒六	上瓶
	叡岡峨輪 谷	ケ 倉[原奏信	[国	大	加	国力	□禅	恩	等口	河		圀(/、	堤	井孫	(久ノ
	華中乙五葛独楊月	崎 [」 一寺 学帝白神	野の開始	,	-			町寺 佐右		院口 可蚌		鱼松	寺」	里		E世原 E板衣
	蔵堂 _{寺山} 井鈷柳輪	輪上弁	2殿山 ^力	温度は	圣鷗洋	炊	茂			鍛華							井之
四	独州アア 水水浦	滝水水/	水步	'	く法水	111][[水ノ	ノ井	治水	沱池	池井				牛水	、清滝
波			7	´ 出: /	, 然 ‡ 水	Ш	711	井	井	ノ 井	水		井		井	: 井	水
屋	司司司司司司司司司	同同同				辛	宏力	同同			同同	司司同		同同			同前
定					頭	差	勧 2//										頭
	栈比一三上長西西					添	進						同黨	安[五東
郎	敷 叡 条条京岡岡院 嶽 山	背峨翠	【閣満□ 寺寺□	京室	岡笠		元	条北	香天宫神	見谷]迎野 身院	子 当 山	井	草	田如 堂	条山
板	鷹水 縣金梅三鶏清	洗 厭 洼	光中飛	常繁累	明 地	字		嗷雪	到千	黒栄	東馬			阿阿	少佛寶		若山
	ノ呑之剛雨尊冠水	玉 離 泉	:下川鳥	盤之伽	星魔	宇	木	上水	母鳥	染際	井服	始即				睪醐	宮之
	水 吓 井水 八匹井	水柳	水井井	井井井	對不	治	津	ノノ	之ケ	井明	オ	〈水水	、洗力	く侍	ノ井	水	放井生
	井泉井殿	水			ノ 動井井	Ш	Ш	水井	水池	星水			水	之,水	中		池
	•				-					-							

2.4 基本的情報

「都名水視競相撲」は、国内でも京都府立京都学・歴彩館や京都大学など限られた図書館や博物館に収められている大変貴重な史料である。確認できる範囲でも現存するのは5枚程度と推察される。数年前に運良く筆者は現物を手に入れることができた。本研究で扱うのは筆者所蔵の番付である。

番付の大きさについては番付の印刷のある部分で縦 42cm、横 32cm センチで、当時流通していた番付のなかでも大判の部類に入る。この番付は、発行年のあるものと無いものとが流通していたことはわかっている。筆者所蔵の番付には年号の記載がない。『江戸時代図史<2>京都』(筑摩書房)に掲載の版には、上部右端に「享和二戌年六月新版」(1802年)と書かれており、項目には変化みられないが、新版とあることから、これより古い可能性が高い。ただどれだけ古いものか確定する材料がないため、ここでは、1802年として議論を進めていこう。

番付に記載されているのは、「東南之方」に99の名水、「西北之方」に99の名水、合計で198もの名水がリストアップされている。それだけの名水を要するのは、全国での例はなく、京都ならではということであろう。

次節より番付の内容の検討および特定に入っていく。その特定にあたっては、江戸時代に刊行された 地誌や古地図をはじめとして膨大な史料とつきあわせながら、時間を掛けて特定作業に取り組んだ。

主として参照した地誌や古地図、事典類は下記の通りである。『京童』、『京童跡追』、『京雀』、『京雀跡追』、『京羽二重』、『京羽二重(寶永板)』、『京羽二重織留』、『京独案内手引集』、『都すゞめ案内者』、『京町鑑』、『日次紀事』、『名所都鳥』、『堀川の水』、『京内まいり』、『都名所車』、『都花月名所』、『洛陽十二社霊験記』、『都名所図会』、『拾遺都名所図会』、『寶永花洛細見圖』、『扁額軌範』、『花洛繪馬評判』、『都林泉名勝圖會』、『雍州府志』、『京師巡覧集』、『洛陽名所集』、『出來齋京土産』、『近畿暦覧記』、『菟藝泥赴』、『京城勝覧』、『追補近畿歴覧記脱文』、『京城勝覧挿繪』、『山城名勝志(乾・坤)』、『山城名勝志圖』、『山州名跡志(乾・坤)』、『京都坊目誌1~5』、『扶桑京華志』、『山城名跡巡行志』、『山城名所寺社物語』、『京都大事典』、『歌枕大観』など。

なお、名水の特定および出典の記載にあたっては複数の地誌に掲載されている場合はもっともよく知られた地誌である『都名所図会』、『拾遺都名所図会』、手に取りやすい『京都大事典』などを優先的に示すこととした。

2.5 行司·頭取·勧進元·差添

「行司・頭取・勧進元・差添」とは、名水と聞いて誰もが文句をつけない別格の存在として示された ものである。これらに共通した要素を探ることも番付けの格付けを理解するうえでの重要な手続きであ る。それでは、番付の内容の検討に入ろう。

中央には、大きく番付の名称として「都名水視競相撲」とあり、行司は中央に大きく、「淀川」、右から「狐川」、「清滝川」、「白川」、「高野川」とある。

「淀川」は、琵琶湖から唯一流出する瀬田川が宇治に入って宇治川と名を変え、京都府と大阪府の境界付近で桂川、木津川と合流してから大阪湾に流出するまでを指す。淀川に流入する河川の数は全国でもっとも多く、わが国最大規模の河川である。流域の大動脈として、水運、灌漑、上水道、工業用水、発電などに利用され、社会的、経済的、文化的な価値は極めて大きく、行司の中核としてふさわしい存在である。宇治川、桂川、木津川の合流地点である淀は歌枕として知られている(『歌枕大観』)。

「狐川」は、長岡京市柳谷付近に発する小泉川が桂川と合流する最下流部の古称。歌枕のひとつ(『京

都大事典』)。「清滝川」は、北区大森周辺の桟敷ヶ岳や飯盛山を水源とし、愛宕山山麓を南下して保津川 に流入する川。これも歌枕である(『京都大事典』)。

「白川」は、左京区の東山山中に発し、西流して北白川に至り、吉田山の東、岡崎方面に流れ、琵琶湖疏水に入った後、四条大橋の北で鴨川に注ぐ川。白川も歌枕(『歌枕大観』)。「高野川」は、左京区北東部、途中越付近の山中に発し、大原・八瀬・上高野地区を経て出町柳で鴨川と合流する川(『京都大事典』)。大原地区を流れる高野川は大原川と呼ばれ、歌枕である(『歌枕大観』)。このように行司の代表的な5つの川は、いずれもが歌枕と知られており別格である。

その下段には、右から「笠置布川」、「放生川」、「金川」、「相庭川」、「呂律川」、「糺川」、「井出玉川」、「涙川」、「高瀬川」、「鞍馬川」、「貴舩川」、「落合川」、「堀川」、「藍染川」、「有栖川」、「芹川」、「音羽川」、「紙屋川」、「宇多川」、「五位川」、「中川」、「若狭川」、「御手洗川」、「瀬見ノ小川」が並ぶ。

「笠置布川」は、相楽郡笠置町を流れ木津川に注ぐ布目川。

「放生川」は綴喜郡田辺町松井の丘陵から北流し、男山を迂回して、枚方市樋之上で淀川へ流入する 大谷川の下流、八幡市平谷の買屋橋以北部分を指す(『京都大事典』)。

「金川(こがねがわ)」は、八幡市橋本の南端あり、淀川に注いだ川(『山州名跡志 13』)。いまも小金川という地名が残る。

「相庭川」は、伏見区と宇治市との境にある供水峠北西の山中に発し、伏見区日野を通り、山科川に流れ込む合場川を指す。中流部には平清盛の四男、三位中将平重衡の塚がある(『京都大事典』)。

「呂律川」は、大原の音無の滝川を指す。南北に別れて南を呂川といい、北を律川とつなぐ(『都名所図会3』)。

「糺川」は、下鴨神社の糺の森を流れる泉川のことであろう。糺の森は歌枕(『歌枕大観』)。

「井出玉川」は、木津川に流れ込む綴喜郡井手町の玉川。歌にも詠まれている(『拾遺都名所図会 4』)。

「涙川」は、男山の南の志水の女郎花塚付近を流れた川。放生川の上を指す(『都名所図会 5』)。

「高瀬川」は、二条橋西方に発し、鴨川の西、木屋町通に沿って流れ鴨川に注ぐ人工河川(『京都大事典』)。「鞍馬川」は、花脊峠に発し、貴船川、静原川をあわせて、加茂川に合流する川(同)。

「貴舩川」は、芹生峠付近の山中に発し、貴船町を流れ、鞍馬川に合流する。貴船川も歌枕(『歌枕大 観』)。

「落合川」は、貴舩川と鞍馬川の合流するところを指す(『山州名跡志6』)。

「堀川」は、北区から上京・中京・下京・南区へ南北に流れる川。中世には川沿いに材木屋が集まり、 近世以降は染色業も行われた。

「藍染川」は五条高倉を経て間之町より人家の下を南に流れた川。濁水であったという(『都名所図会2』)

「有栖川」は、右京区嵯峨観空寺谷町から発し、広沢池からの支流もあわせ、桂川に合流する。

「芹川」は、伏見区下鳥羽芹川町周辺にあったという古い川。これも歌枕(『京都大事典』)。

「音羽川」は、左京区の修学院離宮と林丘寺の南方を流れる高野川の支流を指すとみられる(同)。ただし、清水寺の音羽の滝を水源に鴨川に注ぐ東山区の音羽川、さらには山科区の音羽山を流れる音羽川の可能性もないとはいえない。

「紙屋川」は、天神川の上流部を指す。北区鷹峯北方の山中に発し、北野天満宮の西方付近より、天神川と名前を変え、太秦で御室川と合流して桂川に注ぐ(同)。

「宇多川」は、北区金閣寺の西、氷室谷から発し、御室川に合流する(同)。

「五位川」は、乙訓郡大山崎町の北の境にあり、桂川に注いだ川。五位鷺がたくさんいたことから名

付けられたという(『名所都鳥2』)。山崎町には五位川という地名がいまも残る。

「中川」は、上京区の今出川通から寺町通りを南北に流れていた今出川の支流。京極川とも呼ばれる。 歌枕である(同)。

「若狭川」は、堀川の上流部を流れた二流のうちのひとつを指す(『都名所図会 1』)。鷹峯から今宮の東を流れた。もうひとつの流れは小川(こがわ)と呼び、一条戻橋の下にて合流した(同)。

「御手洗川」は、北区上賀茂を流れる明神川の古称。歌枕である(同)。あるいは、下鴨神社の御手洗川。どちらかは判断がつかない。

「瀬見ノ小川」は、鴨川の別称を指すという立場と下鴨神社の御手洗川の別称(『都名所図会 6』)というふたつの立場がある。これも歌枕である(『歌枕大観』)。

続いて、頭取には、「加茂川」、「大炊川」とある。

「加茂川」は、北区雲ヶ畑町桟敷ヶ岳付近の山中に発し、上賀茂で京都盆地に入り、出町柳付近で高野川と合流、四条付近で白川、最下流部で堀川、西高瀬川をあわせて伏見区下鳥羽下向島町で桂川に合流する京都を代表する川である(『京都大事典』)。

高野川との合流点を賀茂川、以南を鴨川と記すのが通例である。歌枕である(『歌枕大観』)。

「大炊川」は、桂川の上流部の大堰川(大井川)を指す。丹波山地の大悲山付近に発し、亀岡盆地に至る。亀岡・京都間の峡谷は保津川と呼ぶ。平安期の嵐山では貴族の舟遊びが盛んであった(『京都大事典』)。歌枕である(『歌枕大観』)。

勧進元に「木津川」、差添には「宇治川」とある。

「木津川」は、三重県の鈴鹿・高見両山地に発する柘植川、服部川、名張川などを集め、木津市から 北流して八幡市の北で淀川に流入する川(『京都大事典』)。古くは泉川とも呼ばれた。泉川は歌枕(『歌 枕大観』)。

「宇治川」は、琵琶湖を源に発し、宇治丘陵の谷間を深く開折して京都盆地の低地を流れ、桂川、木 津川と合流し、淀川となって大阪湾に入る。古来、近江国からの造寺用材の輸送路となり、水上交通の 幹線として知られた。宇治川も歌枕である(『歌枕大観』)。

みてきたように行司の代表的な5つの川・頭取の2つ・勧進元・差添ともすべてが歌枕として多くの歌に詠まれた川であった。行司の脇を固めた下段の24の川にも歌枕が含まれていた。

2.6 東南之方 (東の番付)

ここからは番付に格付けされた名水に入っていく。ここからは文章で示すと煩雑になるため、それらを表にまとめた。格付け順にそれぞれ番号を振り、番付の段位、位、地域、名称に簡単な説明と出典を明記した。

表-2 東南之方(東の番付)①

No	段	位	地域	名称	説明	出典
1	1	大関	洛西	廣澤ノ池	嵯峨の広沢池。月見の歌詠みの名所。歌枕。	都名所図会4
2	1	関脇	洛西	長岡ノ池	洛西の長岡天満宮の池。長岡は歌枕。	都名所図会4
3	1	小結	洛北	御菩薩池	松ヶ崎の深泥池。歌詠みの名所。歌枕。	都名所図会5
4	1	前頭1	洛北	龍安寺ノ池	竜安寺の池。	都名所図会6
5	1	前頭2	洛西	大澤ノ池	嵯峨・大覚寺の東の大沢池。歌詠みの名所。歌枕。	都名所図会4
6	1	前頭3	西岩倉	三段ノ滝	西岩倉山金蔵寺の小塩山の中腹にある三段ノ滝。	都名所図会6
7	1	前頭4	神泉苑	法成就ノ池	神泉苑の法成就池。	都名所図会1
8	1	前頭5	金閣寺	鏡湖池	金閣寺の閣前に広がる池。	都名所図会6
9	1	前頭6	下鴨	御手洗ノ水	下鴨神社。歌詠みの名所。	都名所図会6
10	1	前頭7	洛西	鯉澤ノ池	大原野林中にある春日社(大原野神社)の南にある鯉澤の池。歌 詠みの名所。	都名所図会4
11	2	前頭8	貴舩	龍王ヶ滝	貴船神社近くの龍王ヶ滝。	拾遺都名所図会3
12	2	前頭9	相国寺	功徳池	万年山相国承天禅寺(相国寺)の池。	都名所図会1
13	2	前頭10	嵯峨	八宗論池	小倉山の東にある五台山清涼寺の池。	都名所図会4
14	2	前頭11	嵯峨	龍女池	小倉山二尊院の門前の池。二尊院は歌枕。	都名所図会4
15	2	前頭12	小塩	潮溜池	小塩山十輪寺より東にある池。在原業平が塩を焼くため、海水を 溜めておいた池。	都名所図会4
16	2	前頭13	嵯峨	千鳥淵	大井川の千鳥淵。大井川の渡月橋より上流の南岸を指す。	都名所図会4
17	2	前頭14	洛北	音無ノ滝	大原の来迎院の東にある音無ノ滝。	都名所図会3
18	2	前頭15	嵯峨	戸難瀬ノ滝	戸無瀬の滝は櫟谷の西にあり。大井川に落つるなり。歌枕。	都名所図会4
19	2	前頭16	鷹峰	菩提ノ滝	鷹峰寂光山常照寺より西の山中にある菩提ノ滝。	都名所図会6
20	2	前頭17	小塩	冴野ノ沼	春日社の西北にある小塩山勝持寺(花の寺)の石壇の下にある沼。歌詠みの名所。	都名所図会4
21	2	前頭18	大原	朧ノ清水	大原寂光院のほとりにある清水。昔より名高き清水にして和歌に 多数詠まれた。	都名所図会3
22	2	前頭19	天竜寺	曹源池	大井川の北にある霊亀山天竜資聖禅寺(天龍寺)の庭園の池。	都名所図会4
23	2	前頭20	等持院	芙蓉池	衣笠山の麓にある等持院の池。	都名所図会6
24	2	前頭21	月ノ輪	高野ノ滝	愛宕山の山中の月ノ輪にあった滝とみられる。	
25	2	前頭22	月ノ輪	日晩ノ滝	愛宕山の山中の月ノ輪にあった滝とみられる。	
26	3	前頭23	愛宕	日暮ノ滝	愛宕山山中にある滝。「寒蝉の滝」とも書く。	都名所図会4
27	3	前頭24	大沢	名杜ノ滝	大沢池にある名古曽滝。歌枕。	都名所図会4
28	3	前頭25	廣沢	佐古曾ノ水	廣澤池の葦原から湧き出す水。「廣澤池の西のかたにして葦原なり」	都名所図会2
29	3	前頭26	花ノ寺	指月池	小塩山勝持寺(花の寺)にある指月池。歌詠みの名所。	都名所図会4
30	3	前頭27	花ノ寺	翁之滝	小塩山勝持寺(花の寺)にある翁之滝。歌詠みの名所。	都名所図会4

表-3 東南之方(東の番付)②

31	3	前頭28	古知谷	御杖ノ水	大原・古知谷光明山阿弥陀寺の湧水。滝のように谷を流れていたという。	都名所図会3
32	3	前頭29	比叡	東塔千手水	弁慶水ともいう。比叡山延暦寺東塔千手堂に千日参籠した弁慶が 汲んだ閼伽井。	都名所図会3
33	3	前頭30	白川	駒ヶ淵	志賀の山越えより流れて鴨川に合流する白川の淵。白川は歌詠 みの名所。	都名所図会3
34	3	前頭31	廣沢	足形ノ池	廣沢にある足形池。現在は弁慶池とも呼ばれる。	
35	3	前頭32	洛西	相沢ノ池	大沢池と広沢池の間にある池。	都名所図会4
36	3	前頭33	大原	世和井ノ池	小野山の音無しの滝から流れ出た律川の橋を渡った右側にある池。	都名所図会3
37	3	前頭34	矢背	實盛甲ヶ淵	八瀬の高野川の甲の淵。「八瀬川、高野より八瀬に至る路の傍 ら、人家の東にあり」	拾遺都名所図会2
38	3	前頭35	鞍馬	蛇ノ閼伽井	松尾山鞍馬寺の閼伽井。	都名所図会6
39	3	前頭36	鞍馬	涙之滝	鞍馬・由岐神社にある小さな滝。『源氏物語』でも歌に詠まれている。	都名所図会6
40	3	前頭37	大原	石不動ノ滝	大原にある滝とみられるが、場所不明。	
41	4	前頭38	洛西	鳴ル滝	鳴滝は仁和寺の西にあり。歌枕。	都名所図会6
42	4	前頭39	サガ	亀尾ノ滝	嵯峨野の亀山の山中にあった滝。歌枕。	拾遺都名所図会3
43	4	前頭40	金閣寺	龍門ノ滝	金閣寺にある滝。	都名所図会6
44	4	前頭41	古知谷	女郎ヶ淵		
45	4	前頭42	古知谷	馬守ヶ淵	大原・大原川(高野川)の上流にある淵を指す。「大原川の和田橋 の下流に女郎淵、馬守淵、石籠淵の三淵がある」。	山州名跡志
46	4	前頭43	古知谷	石篭ヶ淵		
47	4	前頭44	00	薬王ノ香水	鞍馬と静原を結ぶ峠に薬王坂がある。そこで湧き出る水と考えられる。	
48	4	前頭45	大徳寺	真珠庵聖泉	竜宝山大徳寺の真珠庵の庭にある聖泉。	雍州府志8
49	4	前頭46	林丘寺	清泉	林丘寺の清泉。「堂前の東にあり。開闢の後、自然と湧出す」	拾遺都名所図会2
50	4	前頭47	月ノ輪	龍女水	鎌倉山月輪寺の境内に湧く水。龍奇水ともいう。	
51	4	前頭48	一条	清和水	小野小町にまつわる「草紙洗の井」ともいう。	京の名水
52	4	前頭49	一条	晴明ノ井	晴明神社の井戸。	都名所図会1
53	4	前頭50	西山	三鈷寺アカ井	西山三鈷寺の閼伽井。	都名所図会4
54	4	前頭51	廣沢	千壺ノ井	足形池の東にある音頭山(音戸山)に数多くあった井戸の一つ。	都名所図会4
55	4	前頭52	洛北	白川ノ滝	白川の滝。「北白川琵琶町(山中町までの白川の両岸)あたりに あったという」『歌枕大観』。歌枕。	都名所図会4
56	4	前頭53	西洞院	柳ノ水	天下三名水のひとつ。西洞院三条の南にあった。	都名所図会1
57	4	前頭54	双ノ岡	衣ノ滝	双岡にあった滝。双岡は歌枕。	都名所図会6
58	4	前頭55	矢背	神子ヶ淵	八瀬の高野川にある神子ヶ淵。いまもバス停の名前あり。 「観音石の北五町ばかりにあり」	拾遺都名所図会2
59	4	前頭56	妙心寺	風水泉	妙心寺にあった風水泉。	
60	4	前頭57	大徳寺	官池	竜宝山大徳寺の官池。	都名所図会6

表-4 東南之方(東の番付)③

					相国寺の庭園の水とみられる。相国寺のHPに「龍渕水の庭」とあ	
61	5	前頭58	相国寺	龍渕水	相国寺の庭園の小とかられる。相国寺のIPICI 龍渕小の庭」とある。	
62	5	前頭59	相国寺	松鷗軒法然水	相国寺の塔頭松鷗軒にある法然水。	都名所図会1
63	5	前頭60	今宮	義経産水ノ井	牛若丸誕生井の石碑あり。今宮の社の東にある。常盤御前ここに住んで、平時元年に牛若丸(源義経)を産みしとなり。	都名所図会6
64	5	前頭61	太秦	伊佐良井	太秦広隆寺にある閼伽井を指す。	都名所図会4
65	5	前頭62	大原野	朧清水	大原野にもあったとされる朧清水。場所不明。	
66	5	前頭63	大原野	瀬加井ノ水	大原野林中にある春日社の南にある鯉沢の池の傍らにあった。	都名所図会4
67	5	前頭64	□□寺	白山水	小塩の山上にある西山善峰寺の白山水。	都名所図会4
68	5	前頭65		滝殿	不明	
69	5	前頭66		常盤水	不明。常盤の井とは違うため特定には至らず。	
70	5	前頭67	岩倉	智弁水	北岩蔵大雲寺にある智弁水。	都名所図会6
71	5	前頭68	岩倉	鋤上水	北岩蔵大雲寺にある鋤上水。	大雲寺縁起
72	5	前頭69	松ヶ崎	日輪滝	松ヶ崎・涌泉寺の七面宮境内の滝とみられる。	都名所図会6
73	5	前頭70	松ヶ崎	月輪滝	松ヶ崎・涌泉寺の七面宮境内の滝とみられる。	都名所図会6
74	5	前頭71	柳谷	楊柳水	柳谷にある立願山楊谷寺の本堂の後ろにある。眼病平癒の霊水。	拾遺都名所図会3
75	5	前頭72	柳谷	独鈷水	柳谷にある立願山楊谷寺のにある。現在はこちらが眼病平癒の 霊水とされ、独鈷水と呼ばれる。	拾遺都名所図会3
76	5	前頭73	法輪寺	葛井	右京区嵐山の法輪寺の名水。	京の名水
77	5	前頭74	嵯峨	五臺山アカ井	五臺山(五台山)の閼伽井。「五台山に般若寺あり。閼伽井は堂の うしろにあり」。	都名所図会6
78	5	前頭75	西岡	乙訓寺アカ井	大慈山乙訓寺の閼伽井。「大師密法修行にとき、汲みたまひし霊 水なり」。	都名所図会4
79	5	前頭76	比叡	中堂如法水	比叡山根本中堂の閼伽井を指す。如法水と呼ぶ。	都名所図会3
80	5	前頭77	比叡	華蔵院独鈷水	華蔵院のうちにあり。慈恵大師かん開の水。静寂水ともいう。	都名所図会3
81	6	前頭78	衣笠	地蔵院不動井	衣笠山地蔵院の不動井。西芳寺の南にある禅宗にして天龍寺に 属す。	都名所図会4
82	6	前頭79	西岡	明星野ノ井	明星野は今里の東を指す。この近辺にあった井戸とみられる。	都名所図会4
83	6	前頭80	御室	閼伽井	御室閼伽井。「仁和寺御影堂の東方にある。木の四角な枠の井戸で、ことそいだ覆屋がある」	京都民俗誌
84	6	前頭81	上京	繁之井	上京・滋野井とみられる。	拾遺都名所図会1
85	6	前頭82	上京	常盤井	西洞院一条北二町にある常磐井。	京洛名水めぐり
86	6	前頭83	000	飛鳥井	万里小路(柳馬場通)二条の南、東側人家の裏にあり。清冷にして古より名水と賞す。	拾遺都名所図会1
87	6	前頭84	妙満寺	中川井	京極通り二条の南にあった妙塔山妙満寺の堂前にある井戸。洛陽七井のひとつ。	都名所図会1
88	6	前頭85	金閣寺	岩下水	金閣寺の岩下水。	都名所図会6
89	6	前頭86	水薬師	清泉	水薬師寺の清泉。「平清盛熱病のとき、この水を汲んで冷やせしとぞ」	都名所図会4
90	6	前頭87	嵯峨	厭離菴柳ノ水	厭離庵の柳の水。「門の内に柳の水といふ清泉あり」。藤原定家 の小倉山荘跡とされる。	都名所図会4

表-5 東南之方(東の番付) ④

91	6	前頭88	矢背	洗玉水	矢背の洗玉水。場所は特定には至らず。	
92	6	前頭89	西院	清水	西院にあった清泉(しみず)。「野宮より南一町ばかりにあり。小池にして方四間ばかり。池中に祠あり、清水祠と称す」。西院には清水町との地名が残る。	『拾遺都名所図会 3』
93	6	前頭90	西岡	鶏冠井	西岡・鶏冠井村にあった名水とみられる。	拾遺都名所図会3
94	6	前頭91	長岡	三尊院泉殿	長岡・仁和山三尊寺の名水。	拾遺都名所図会3
95	6	前頭92	上京	梅雨ノ井	下長者町和泉町の西北川、人家田中氏の前栽にあった名水。	拾遺都名所図会1
96	6	前頭93	三条	金剛水	矢田山金剛寺の名水。金剛寺は三条の天性寺の南隣に位置。	都名所図会1
97	6	前頭94	一条	縣之井	縣井を指す。御所三名水のひとつでもっとも古い井戸が一條家の 邸宅跡にある縣井。歌枕。	都名所図会1
98	6	前頭95	比叡山	水呑峠ノ水	比叡山の水呑峠の名水。	大日本地名辞書
99	6	前頭96	桟敷嶽	鷹ノ水	桟敷嶽の南の山腹に岩間より湧き出た名水。	拾遺都名所図会3

2.7 西北之方 (西の番付)

表-6 西北之方(西の番付)①

No	段	位	地域	名称	説明	出典
1	1	大関	城南	巨椋入江	歌詠みの名所。歌枕。「巨椋の入り江は豊後橋の南、向嶋より 渺々たる水面なり」	都名所図会3
2	1	関脇	城南	美豆入江	巨椋池の西から淀へかけての地。歌詠みの名所。歌枕。	歌枕大観
3	1	小結	城南	伏見ノ澤	『山州名跡志』から「指月」の記述。「指月 地名 橋ノ北東二至ル 二町餘ノ内ヲ云フ 此ノ地景色アリ。東南西二渺々タル流アリ。巽 二巨椋ノ入江。東二伏見ノ澤アリ。爾バ便チ月ヲ愛スルニ無雙ノ 景色也」歌詠みの名所。場所はおおよそ。	山州名跡志
4	1	前頭1	稲荷	谺ヶ池	伏見稲荷大社の池。新池ともいう。歌枕。「池の面にかげをうつさば稲荷山みづの御垣に波やたつらん」	拾遺都名所図会2
5	1	前頭2	伏見	江雪堀	伏見城の水堀。紅雪池ともいう。伏見城は歌枕。『拾遺都名所図会4』。『都名所図会5』の伏見黒染の絵図に描かれている。	都名所図会5
6	1	前頭3	宇治	米炊水	宇治川の水。田原川との合流の下流あたりとみられる。『宇治川両岸一覧』2に絵図。「宇治川 源出レ自二近江國湖水一、歴二勢多橋一、經二鹿飛櫻谷一、過二米炊一、歴二宇治橋下一入二伏見一、〈米炊急流之所、而白波漲起、其色如レ覆二米泔水一、故俗號二米炊一」『雍州府志』	雍州府志
7	1	前頭4	大通寺	神龍池	万祥山大通寺遍照心院の神前の池をいう。六孫王経基の子満仲が父の墓所に一字を建立したのが起こり。もともとは現在の六孫王井の場所にあり広大だった。JR用地となって六孫王神社は残して、現在の場所(南区西九条比永城町1)に移った。国文学上多数。	都名所図会2
8	1	前頭5	銀閣寺	洗月池	東山慈照寺(銀閣寺)の池。歌枕。	都名所図会3
9	1	前頭6	八幡	石清水	石清水八幡宮の岩清水。「本殿の南東、山の中腹にあり。傍らに 石清水権現社あり」。歌枕。『歌枕大観』	都名所図会5
10	1	前頭7	小枝	稲瀬ヶ淵	鴨川の淵。小枝は桂川との合流点の上流あたりとみられる。『京 都名所独案内』	京都名所独案内
11	2	前頭8	笠置	千手ヶ滝	修験者の修行場である笠置山。「千手瀧、石正童子瀧、金剛童子瀧(此山のひがしにあり、渓川のながれなり)。笠置山は歌枕。	都名所図会5
12	2	前頭9	東福寺	思遠池	東福寺の蓮池。	都名所図会3
13	2	前頭10	平等院	阿字池	平等院の阿字池。	都名所図会5
14	2	前頭11	黄檗	放生池	黄檗山萬福寺の放生池。	拾遺都名所図会4
15	2	前頭12	通天	洗玉澗	東福寺の通天橋の渓谷(庭園)。	都名所図会3
16	2	前頭13	七条	鐘ヶ淵	鴨川と高瀬川の合流するあたりの淵。釜ヶ淵ともいう。石川 五右衛門の釜茹での刑に処された釜が流れつたいたところと 伝わる。	京都大事典
17	2	前頭14	若王子	那智ノ滝	正東山若王子(若王子神社)にある那智ノ滝。「南の山下に滝あり。那智ノ滝をうつすとぞ」。	都名所図会3
18	2	前頭15	清水	音羽ノ瀧	音羽山清水寺の音羽の滝。歌枕。「奥の院の下にあり。滝口三すぢ、西のかなたへ落ちて、四季増減なし」。	都名所図会3
19	2	前頭16	山科	牛ノ尾ノ滝	牛尾山法嚴寺への道中にある滝。音羽川最大の滝で、高さが約15m。歌にも多く詠まれた。「布引瀧」とも称され、「牛尾山にあり、高さ三丈余、幅三間計、岩上に布を引くがごとし」。	拾遺都名所図会2
20	2	前頭17	泉涌寺	泉涌水	泉涌寺の泉涌水(泉涌寺水屋形)。「当山の麓に霊泉涌出しければ、号を泉涌寺と改む」。	都名所図会3

表-7 西北之方(西の番付)②

21	2	前頭18	下河原	菊水	下河原の菊水の井。「牛王地社の東方にあり。 瀴泉(えいせん) にして茶に可なり。菊澗の下流このほとりにあり」。 場所はおおよ そ。	都名所図会3
22	2	前頭19	南禅寺	拳龍池	南禅寺の蓮池。	都名所図会3
23	2	前頭20	東福寺	真澄池	東福寺の池とみられる。	都名所図会3
24	2	前頭21	鷲峯山	頭光ノ滝	鷲峯山の五光の滝。修験道の行場。	都名所図会5
25	2	前頭22	鷲峯山	都卒ノ滝	鷲峯山金胎寺の「兜率が滝」。	都名所図会5
26	3	前頭23	鷲峯山	降三世之滝	鷲峯山金胎寺の「降三世の滝」。	都名所図会5
27	3	前頭24	鹿谷	樓門之滝	鹿ヶ谷の樓門之滝。如意寺(宝厳院)があったとされる。	拾遺都名所図会2
28	3	前頭25	深草	茶碗子ノ水	深草の茶碗子ノ水。百丈山石峰禅寺「清泉の銘なり。当寺の門 前、南かたにあり。茶の湯に可なりとて好人これを賞す」。	都名所図会5
29	3	前頭26	勧修寺	氷室ノ池	勧修寺の氷室の池。	捨遺都名所図会2
30	3	前頭27	笠置	老之滝	「笠置」とあることから笠置山にある滝とみられる。特定には至らず。	
31	3	前頭28	長楽寺	蓮華水	長楽寺の蓮華水。長楽寺は歌によく詠われた。	都名所図会3
32	3	前頭29	鷲峯山	仙薬水	鷲峯山にある名水とみられる。	都名所図会5
33	3	前頭30	横大路	赤江ヶ淵	桂川の横大路付近の淵を指す。源為義の妻が夫のあとを追って死んだ所。赤江河原、赤江の崎とも呼ばれる。『精選版 日本国語大辞典』(「赤井河原、いにしえは富森の北より東にいたり、一面の河原なり」)。	拾遺都名所図会4
34	3	前頭31	六波羅	姿見ノ池	六波羅蜜寺の姿見池。	都名所図会2
35	3	前頭32	永観堂	鴬之池	永観堂禅林寺の鴬の池。『都名所図会3』絵図。禅林寺は歌枕。 『歌枕大観』	都名所図会3
36	3	前頭33	木ツヤ橋	芹根之水	堀川通木津屋橋下るの堀川沿いに湧いた芹根水。京の七名水の一つ。堀川と同水位だったので、川水が入らないように書家松下烏石が寄進した井筒で囲まれていたと伝えられる。茶人に親しまれた。現在は石標が立つ。この石標は、烏石が宝暦年間に建てたものであるが、昭和57年の堀川暗渠工事の際に現在地に移された。	都名所図会2
37	3	前頭34	黒谷	熊谷鎧洗池	金戒光明寺黒谷の鎧池。「鎧池・鎧掛け松は、熊谷次郎直実、上 人の教へに婦人し、着せし鎧をこの池水にて洗ひ、松に懸け置き しとなり」。	都名所図会3
38	3	前頭35	大智寺	洗耳泉	百丈山大智寺の名水。	都名所図会5
39	3	前頭36	鷲峯山	金剛童子ノ滝	鷲峯山金胎寺の金剛童子ノ滝。 鷲峯山金胎寺の金剛童子ノ滝とみられる。※笠置寺にも石神童	都名所図会5
40	3	前頭37	鷲峯山	石神童子ノ滝	子ノ滝あり『都名所図会5』	都名所図会5
41	4	前頭38	稲荷山	稲荷ノ滝	稲荷山の滝。稲荷山には滝が多数ある。『拾遺都名所図会2』。どの滝を指すかは不明。稲荷山は歌詠みの名所。歌枕。『歌枕大観』	拾遺都名所図会2
42	4	前頭39	笠置(かさ ぎ)	鴬之滝	瓶ノ原の鴬の滝。瓶原に鴬瀧寺があり、裏山に滝があるという。 「鴬の滝は瓶原の西村の入り口にあり」『都名所図会5』。 瓶原は 歌枕。『歌枕大観』	都名所図会5
43	4	前頭40	笠置(かさ ぎ)	見ヶ滝	笠置の児滝(ちごたき)。「有市村の川中にあり」。	拾遺都名所図会4
44	4	前頭41	笠置(かさ ぎ)	三太夫ヶ淵	泉川(木津川)の渕。「有市(飛鳥路の北)は飛鳥路の北なり。三太夫が淵は泉川の岸にあり」『都名所図会5』。泉川は歌枕。『歌枕大観』	都名所図会5
45	4	前頭42	笠置(かさ ぎ)	鹿ヶ淵	泉川(木津川)の渕。『都名所図会5』に絵図に記載あり。観音谷の 岩場。泉川は歌枕。『歌枕大観』	都名所図会5

表-8 西北之方(西の番付)③

46	4	前頭43	城南	鳥羽ノ古江	鳥羽の里の鴨川の江とみられる。鳥羽里は歌枕。場所はおおよそ。	都名所図会4
47	4	前頭44	伏見	御香水	御香宮神社の御香水。環境省による昭和の名水百選に選定。『都 名所図会5』	都名所図会5
48	4	前頭45	下鳥羽	方便水	下鳥羽の法傳寺の方便水。「方便水門内の北にありはしめ里人をあつめ銭をあたへて念佛を唱させて井を掘しむるゆへ此名あり」。	京都名所独案内
49	4	前頭46	清水	見ヶ淵	清水寺を流れた音羽川にあった淵を指すとみられる。	都名所図会3
50	4	前頭47	丸山	吉水	円山安養寺の吉水の井。「鎮守弁財天の傍らにあり」。	都名所図会3
51	4	前頭48	知恩院	紫雲水	知恩院勢至堂東南隅、御廟下にある小さな池に湧く水。	山州名跡志
52	4	前頭49	宇治	喜撰高浄水	宇治七名水のひとつ。高浄水ともいう。	京洛名水めぐり
53	4	前頭50	東山	太子水	太子水は「知恩院門前跡殿舎の前にあり」。拾遺都名所図会2。 「旧は知恩院中門の北浩玄院の後にあり。今其地に古井あり太子 水と号す」『都名所図会』3「太子堂白毫寺」	都名所図会3
54	4	前頭51	吉田	明星水	神楽岡吉田社 (吉田神社)の明星水。『都名所図会3』絵図あり	都名所図会3
55	4	前頭52	上醍醐	醍醐味水	醍醐寺の醍醐水。	京洛名水めぐり
56	4	前頭53	清水	鴬之水	清水寺の鴬井。「鶯の水は中門の西にあり。霊泉にして地中より 涌き出づること、寒暑に絶えず」。	都名所図会3
57	4	前頭54	南禅寺	駒ヶ滝	南禅寺の駒ヶ滝。「駒が滝は東の峰、独秀峰にあり」。	都名所図会3
58	4	前頭55	竹田	月見ノ池	竹田の西行寺の月見ノ池。	都名所図会5
59	4	前頭56	深草寺	深草ノ池	深草・墨染の池とみられる。深草山墨染寺の絵図には池が描かれており、これを指しているのかもしれない。特定には至らず。	都名所図会5
60	4	前頭57	御影堂	鏡之池	新善光寺御影堂の鏡の池。「鏡の池·塩竈の井は本堂の南北に あり」。	都名所図会2
61	5	前頭58	瓶ノ原	衣之滝	瓶ノ原にある滝とみられる。場所の特定には至らず。	
62	5	前頭59	上久世	板井清水	久世里にあった板井清水。「久世里」の絵図に描かれている。福田寺の東。場所はおおよそ。	都名所図会4
63	5	前頭60	六孫王	誕生水	六孫王神社の六孫王誕生水。京の七名水のひとつ。	京の名水
64	5	前頭61	醒井	佐女牛ノ井	佐女牛ノ井。 七名水のひとつ。 『京洛名水めぐり』。 茶の都七名水。 天下三名水。	都名所図会2
65	5	前頭62	井堤里	玉水ノ井	井堤里の玉水ノ井。『都名所図会5』「玉水の里」。場所はおおよそ。歌枕。『歌枕大観』	都名所図会5
66	5	前頭63	井堤里	玉之井	玉井寺の玉之井。『都名所図会5』「玉井寺」絵図。歌枕。『歌枕大 観』	都名所図会5
67	5	前頭64	大仏	乙之水	大仏殿方広寺の乙之水。都名所図会3	都名所図会3
68	5	前頭65	本圀寺	真如水	本圀寺真如院の真如水。『拾遺都名所図会1』絵図。	拾遺都名所図会1
69	5	前頭66	本圀寺	松陰ノ井	本圀寺持珠院の松陰ノ井。	拾遺都名所図会1
70	5	前頭67	本圀寺	亀ノ井	本圀寺の亀井。本堂の西にあり。上古は田面清水という。『拾遺都 名所図会1』	拾遺都名所図会1
71	5	前頭68	本圀寺	鶴ノ井	本圀寺の鶴井。多門院にあり。亀井と一双の名水なり。織田有楽斎、茶の湯に可なりてこれを賞す。『拾遺都名所図会1』	拾遺都名所図会1
72	5	前頭69	下河原	蛙ヶ池	蛙ヶ池の古跡は「下河原の西、安井惣門通り、民家の奥にあり」 『都名所図会3』『徒然草』	都名所図会3
73	5	前頭70	000	蛙ヶ池	不明	
74	5	前頭71	平等院	阿弥陀水	平等院の阿弥陀水。宇治七名水のひとつ。	京洛名水めぐり
75	5	前頭72	平等院	法華水	平等院の法華水。宇治七名水のひとつ。平等院塔頭の浄土院の 北にあったとされる。2011年井戸復活	京洛名水めぐり

表-9 西北之方(西の番付) ④

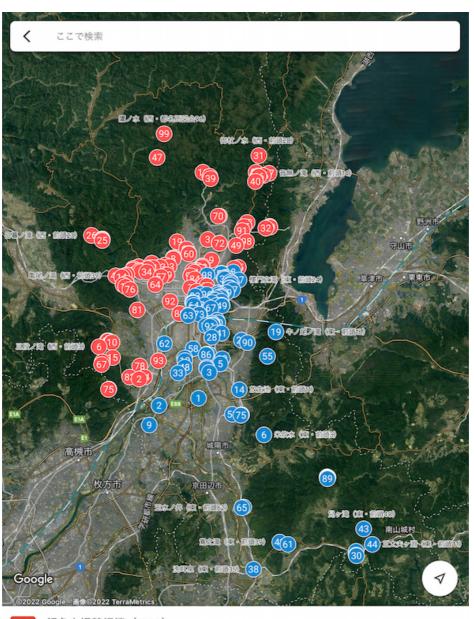
76	5	前頭73	知恩院	小鍛治ノ井	知恩院の小鍛治ノ井。「三門前、石段の右側のつつじの刈込の中に」ある。	京洛名水めぐり
77	5	前頭74	南禅寺	有房井	南禅寺の有房井とみられる。	都名所図会3
78	5	前頭75		塩竈ノ井	新善光寺御影堂の塩竈ノ井。「新善光寺御影堂」に「鏡の池・塩竈の井は本堂の南北にあり」。	都名所図会2
79	5	前頭76	烏丸	手水ノ井	烏丸錦上の手洗水。	京羽二重
80	5	前頭77	仏国寺	金涌水	天王山仏国寺の金涌水。「右のかた松の下にあり。水軽くして茶の湯に可なり」。	都名所図会5
81	6	前頭78	旲山/東 山	山之井	東山の山井。『都名所図会3』の霊山正法寺絵図。拾遺都名所図会2。歌に詠まれている。「正法寺の下に山井という井があった」 『京都民俗誌』。「正法寺の鏡水のことを指すという」『京洛名水めぐり』	都名所図会3
82	6	前頭79	五条	若宮放生池	若宮八幡宮の放生池。	都名所図会2
83	6	前頭80	真如堂	醍醐水	醍醐水は「元真如堂の北、下壇の地にあり」。	拾遺都名所図会2
84	6	前頭81	吉田	龍澤	神楽岡吉田社 (吉田神社)の龍沢池。『都名所図会3』絵図	都名所図会3
85	6	前頭82	深草	佛ノ井	深草にある井と考えられる。場所の特定には至らず。	
86	6	前頭83	深草	少将ノ井	深草少将井姿見の井。『京都民俗志』。『都名所図会5』「深草欣浄寺」四位少将古跡の絵図あり。	都名所図会5
87	6	前頭84	安井	阿波内侍之水	安井観勝寺光明院の井戸とみられる。「安井観勝寺光明院は古より藤の名所にて、崇徳天皇の后妃阿波内侍このところに住ませ給ふ」都名所図会3。「光明院観勝寺は応仁の乱(1467~1477年)の兵火により荒廃しましたが、元禄8年(1695年)に太秦安井(京都市右京区)にあった蓮華光院が当地に移建され」たとある.	安井金比羅宮web
88	6	前頭85	鷲峯山	加持水	鷲峯山金胎寺の加持水。	都名所図会5
89	6	前頭86	鷲峯山	馬足洗水	鷲峯山金胎寺の馬足洗水。	都名所図会5
90	6	前頭87	小野	小町水	山科小野の随心院の小野小町水。『都名所図会5』、『京洛名水めぐり』。深草少将との百夜通伝説。	都名所図会5
91	6	前頭88	遣迎院	独鈷水	遣迎院の独鈷井。	拾遺都名所図会2
92	6	前頭89	口口寺	馬脳水	不明。特定には至らず。	
93	6	前頭90	四条	夷井	四条油小路の蛭子水。	都花月名所
94	6	前頭91	黒谷	栄摂院明星水	黒谷の栄摂院明星水。「黒谷の山内栄摂院の奥庭にある。ちょう ど山のふもとに当たり、清水がたたえられている」。	京都民俗誌
95	6	前頭92	伏見	黒染井	伏見黒染の黒染の井。『都名所図会5』「伏見黒染」絵図。場所は おおよそ。	都名所図会5
96	6	前頭93	錦天神	千鳥ヶ池	錦天神社の千鳥ヶ池。「当寺庫裏の後にあり。河原院にありしをこ こにうつす」。	都名所図会1
97	6	前頭94	御香宮	乳母之水	御香宮の北にあった姥水(うばがみず)とみられる。「御香宮の北 築垣の外東西に通る路の北にあり。清泉なり」。	山州名跡志
98	6	前頭95	東北院	雲水ノ井	京極遣迎院(東北院)の雲水の井。「客殿の南東にあり」。	都名所図会拾遺1
99	6	前頭96	三条	蹴上ノ水	蹴上げの水。『都名所図会3』。「日向大神宮入口から220メートルばかり山手へかかった所、東小者座町の民家の内に現存する」『京都民俗誌』。歌にも詠まれている。場所はおおよそ。	都名所図会3

2.8 名水の位置関係の特定

198 の名水を特定したうえで地図上に配置して位置関係を確認した。その際に、GoogleMap を活用して下記のリンクから参照できるようにした。PC はもちろん、タブレット端末やスマートフォン上でGoogleMap アプリを通じて、「都名水視競相撲」に記載の名水が示される。視覚的に情報を得ることができ、気軽に江戸時代の名水探訪ができる。

研究成果の実践的な還元を意図して下記を作成した。江戸時代の人びとの水に対する価値観を探る "アクアツーリズム"のひとつの方法として今後さらに充実化を図っていきたい。

https://www.google.com/maps/d/u/0/viewer?mid=1c1h9ecYy0gW7eFe1Q8F9SqWEhYgD-wYA&hl=ja&ll=35.00568542203955%2C135.7327782041422&z=12



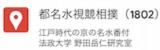


写真-2 GoogleMap 上の名水の位置関係(全体)

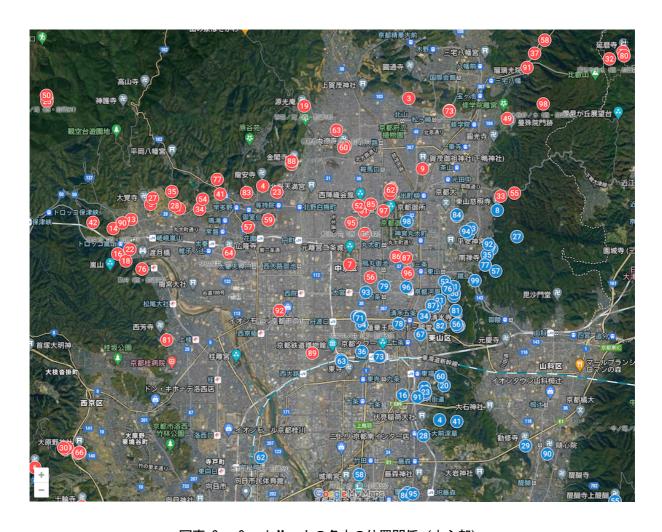


写真-3 GoogleMap 上の名水の位置関係(中心部)

3. 分析および結論

本研究では、江戸時代の名水番付である「都名水視競相撲」において、なぜ名水とは呼べないような 池や沼が上位に位置し、湧き水や井戸水が下位に位置づけられているのか、その理由を明らかにしてき た。

「都名水視競相撲」の翻刻および江戸時代の地誌を突き合わせての名水の特定作業からみえてきたことは、上位にある名水には共通点があることである。それはすなわち、和歌の「歌枕」になっていることである。この共通性は、「行司・頭取・勧進元・差添」という誰もが文句をつけない別格の存在にも見出すことができる。すなわち、和歌の「歌枕」になっていたり、多くの歌に詠まれる名所ほど上位に位置付けられる傾向にあるということである。

さらに当時の観光案内書でもあった地誌を参照するなかでわかってきたことは、名水や名井という項目には、それらはいわゆる名所(ナドコロ)としての紹介となっていることである。その際に、注目されることは、その由来だけでなくその場で詠まれた和歌が必ずといっていいほど記載されていることである。

そのように考えると、江戸時代の人びとは名水の探訪を通じて、水を飲んだり味わったりするというよりも、むしろ水辺の風景を通じて和歌を詠んだ詠み手の心情を味わい、楽しんでいたといえるのかもしれない。つまり、名水を味わうことは「水の味ではなく、人びとの心情をも味わうこと」という新しい方向性がありうることを示しているのである。

このことを抽象化していえば、江戸時代のアクアツーリズムとは、水をみて感じた「人びとの価値観を共有化する行為」ととらえることもできるかもしれない。

このような指摘はやや斬新に聞こえるかもしれないが、アクアツーリズムが背後仮説に背負っている と想定される内発的発展論において、類似の指摘を社会学者の鶴見和子からも見出すことができる。

鶴見和子らによる内発的発展論はオルタナティブな近代化論として社会科学にはよく知られた存在であるが、近代的な従来型の発展(外来型発展)は、経済発展を重視するという単線発展の意味で価値中立的(当該地域の価値観が入っていない)なのに対して、内発的発展は価値明示的な特徴を持っているという(鶴見 1989)。

ここでいう価値明示的とは、それぞれの地域に暮らす人びとがどのような発展を望んでいるか、地元の価値観を示していくことが内発的発展には必要だという意味である。よく知られているように、内発的発展論では経済発展を重視するという先進国型の単線発展ではなく、ブータン王国のように幸福度という独自の価値観を明示して、その国らしい発展を目指すことを提唱してきた。

これをアクアツーリズムに当てはめれば、次のようにいえるだろう。冒頭で示した通り、現代のアクアツーリズムの多くの地域では、公的選定という国による価値中立的な物差しによる価値付けに頼りすぎており、他との差異が見いだせなくなっている。けれども、江戸時代の名水番付の分析や鶴見の指摘をふまえてみると、大切なことは国などの外部の評価に頼るのではなくて、地元の人たちが名水をどのように愛でてきたのか、自分たちの価値観を示していくことこそが必要があるということだ。

名水といえば、現代的な価値観からいえば、「水のきれいさ・旨さ」が重視されるが、それは絶対的な価値ともいえない。それよりも、江戸時代の人びとにとっては、水に対する「心=思い」がより評価される時代だったのかもしれない。

このことは現代にも応用できるものであり、水に対する「地域の思い」を体現するアクアツーリズム の可能性を示してくれているのではないだろうか。

引用文献

- 黒川真理恵,2011「京都の版元阿波屋定次郎の出版活動について一出版活物と所在地の変遷を中心に」 『民族芸術』(27) pp.64-74
- 黒川真理恵, 2012「19世紀前半の京都における『はやりうた』の唄本について一阿波屋定次郎の出版活動を通じて」『民族芸術』(28) pp.133-139
- 鶴見和子,1989「内発的発展論の系譜」鶴見和子編『内発的発展論』pp. 43-64, 東京大学出版会
- 野田岳仁, 2013「観光まちづくりのもたらす地域葛藤 ー「観光地ではない」と主張する滋賀県高島市 針江集落の実践から」『 村落社会研究ジャーナル』 20(1) pp.11-22
- 野田岳仁, 2014「コミュニティビジネスにおける非経済的活動の意味ー滋賀県高島市針江集落における 水資源を利用した観光実践から」『環境社会学研究』 20, pp.117-132
- 野田岳仁, 2018「コモンズの排除性と開放性―秋田県六郷地区と富山県生地地区のアクアツーリズムへの対応から」鳥越皓之・足立重和・金菱清編『生活環境主義のコミュニティ分析ー環境社会学のアプローチ』ミネルヴァ書房. pp.25-43
- 林英夫・青木美智男,2003『番付で読む江戸時代』柏書房
- 林英夫・芳賀登, 1973 a 『江戸明示庶民史料集成全三巻 番付集成(上)』柏書房
- 林英夫・芳賀登,1973 b『江戸明示庶民史料集成全三巻 番付集成(下)』柏書房

助成事業者紹介

野田岳仁

現職:法政大学現代福祉学部准教授

主な著書:『環境社会学の考え方―暮らしを見つめる 12 の視点』(共著書、ミネルヴァ書房、2019年)』、『生活環境主義のコミュニティ分析―環境社会学のアプローチ』(共著書、ミネルヴァ書房、2018年)』、 『原発災害と地元コミュニティ―福島県川内村奮闘記』(共著書、東信堂、2018年)、『Rebuilding Fukushima』(共著書、Routledge、2017年)など。